

Mint Club



造幣局創業150年にまつわる話

第3回「現金出納簿から見た日進学社運営」

はじめに

今から150年ほど前、創業間もない造幣局¹に学校が設立されました。校名を「日進学社²」といいます。造幣局で働く職員に加え、職人や外来生も受け入れていました。後には、職員の子供や年少の家族を主な対象とした小学校や幼稚園を設けるなど、初等教育の場としても発展しています。

造幣局はなぜ学校を設立したのでしょうか。また、その学校はどのような歴史をたどったのでしょうか。造幣局創業150年にまつわる話の第3回目は、創業当時の造幣局にあった学校、日進学社のお話です。

日進学社の設立と発展

創業間もない時期の造幣局で働くにあたって課題となったのが、お雇い外国人と呼ばれる人々との関係です。近代国家にふさわしい純正画一な貨幣の製造を行うためには、西洋の優れた技術や知識を持った外国人による指導が欠かせませんでした。ところが日本人職員の中には、英語を始めとして、西洋の学問や文化に精通している者は多くありませんでした。

そこで、英語や化学、数学などの学問を身に着け、ひいては外国人に頼らず、日本人の手だけで造幣局を運営できるようになりたいという思いから、明治5（1872）年、職員の有志は造幣局の中に学校を設立しました。これが日進学社の始まりです。職員たちは、始業前や終業後に勉強に励みました。そして設立から数か月後には、教師に外国人を迎え、職人や外来生にも入学を許可しました。

明治8（1875）年、雇用契約の満了を理由に、造幣局で働くお雇い外国人の約半数が姿を消します。同じ年、大阪府に提出した「造幣寮中日進学社設立願」が許可され、日進学社は正式な私立学校となりました。こ

の資料から明治8年10月時点の日進学社において、お雇い外国人のマルカムという人物が教師を務めていたこと、化学・英語・習字・算術・漢学の5つの学科があったことが分かります³。

明治9（1876）年以降、日進学社は職員に対する教育に加え、その子供や年少の家族に対する教育に力を入れるようになっていきます。明治9年頃に小学科、明治12（1879）年頃に女子に裁縫などを教える女紅科、明治15（1882）年頃に幼稚園を相次いで設立しました。明治14（1881）年の記録によれば、全生徒183名のうちのほとんどが小学科の生徒でした。

後に小学科は小学校になりましたが、明治21（1888）年頃、幼稚園とともに廃止となりました。これは、学制の浸透と定着により、子供たちの教育は公に委ねられるようになっていったことによるものと思われます。一方、職員を主な対象とした学科は、明治15年に設立された「造幣学研究会」（後に「造幣学術研究会」）という組織で、より専門的な研究が行われるようになっていったようです⁴。

現金出納簿の記録を読み解く



さて、この日進学社ですが、運営はどのように行われていたのでしょうか。近年、その財政面を明らかにするにあたって重要な史料が造幣博物館で未整理になっていた古文書の中から発見されました。

この史料は日進学社の会計担当者が作成した現金出納簿で、明治7（1874）年から明治24（1891）年にかけての入出金が記録されています。主たる収入や支出の金額に加え、その内訳から生徒や教師の人数や名前、使っていた教科書や教材なども読み取ることができる、とても貴重な史料です。

例として、明治11(1878)年1月分の収入と支出の内訳について見てみましょう。



年月日	訳	請高	払高	残
		円	銭	円
明治十一年				
一	前業餘高	3048	332	2916
十	日本地誌略四十冊代文部省報告課渡		5	2911
十一	十年十二月分職人長屋下戻代	4	000	
十四	キヤブラス経済書巻贈買入代			582
十七	職人長屋所十年後半半年分下戻代		400	
十八	職見、林、天方、田口、吉武入学費精	1	250	
十八	本月份謝儀高	8	800	
廿一	青木、小原書職代月謝納	1	000	
廿二	小学生徒七十分月謝	2	800	
廿八	天方、森、西川、山田、小原、西岡、岡 藤田、月給		64	000
廿八	小使治助月給及燈油代		6	150
廿八	日本地誌略廿冊代文部省報告課渡		2	000
廿八	十二月中繰前度五徳代長谷川渡		3	400
廿八	小学用机腰掛大置備其外代同人渡		6	110
廿八	真駒小傭、七十年代同人渡		3	900
廿八	小学生徒記章九十枚代		1	900
廿八	本月份補助金	50	000	
廿八	本年開校ニ付生徒某外へ還シタル奉還代 田百十三人分巻人ニ付六銭		6	780
		3116	582	3068
				404

左から日付、「訳」(内訳)、「請高」、「払高」、「残」と並んでいます。「請高」が収入、「払高」が支出、「残」が残高です。まず主たる収入は、大蔵省から支給される補助金50円⁵と、生徒から支払われる月謝であることが分かります。また下戻代、つまり造幣局の職人長屋に住む人などの排泄物を田畑の肥料として売り払った代金も貴重な収入源でした。

一方、主たる支出は教師など日進学社で働く人の人件費(月給)で、それに次いで教材費や雑費がありました。1月ということで、年始の祝賀として生徒ら130名に赤飯をふるまった代金も大きな支出でした。

こうして見ると、収入68円25銭に対し、支出は96円67銭7厘。1月の特別な支出である赤飯代(6円78銭)を差し引いて考えたとしても、大幅な赤字です。48円17銭8厘の現金残高があるものの、日進学社の財政は余裕のあるものではなかったことがうかがえます。特に収入の大部分を大蔵省による補助金に占めており、これなしでは運営は難しかった

ものと思われます。

以上のほか、この現金出納簿からは、当時の人たちが何とか収入を得ようと工夫した痕跡を読み取ることができます。例えば、造幣局内の不用品を売り払った代金のほか、漁者を雇って入堀の魚を捕獲し、それを売り払った代金が日進学社の収入に充てられたことが記録されています。また明治11年以降、造幣局内に保管していた日進学社の資金を三井銀行に預けることで、たびたび利息収入を得ていたことが分かりました。

下戻代もそうですが、こうした事柄からは、当時の人たちが学問や研究、教育の場である日進学社をいかに大切に考えていたかがうかがうことができます。また、明治15年の幼稚園設立の際には、6月から12月にかけて、職員等から335円74銭2厘(利子含む)もの寄付金が寄せられたことも分かりました。

おわりに

創業当時の造幣局は、大阪における「新知識新技術の源泉」⁶とも称される存在でした。日進学社は、お雇い外国人がもたらした「新知識新技術」の受容や普及に欠かせない場であり、造幣局のあゆみを学問や研究、教育の面から支えました。また、後に小学校や幼稚園といった初等教育に注力したことは、大阪の教育史上においても興味深いことだと思われます⁷。

しかしながら、その実態は未だ謎に包まれています。今回新たに見つかった現金出納簿は、日進学社運営の財政面を明らかにする重要な史料で、今後も研究を進めていきたいと考えています。

造幣博物館の創業150周年特別展第Ⅲ期では、日進学社に関する史料を取り上げる予定ですので、ぜひお越しください。

1 造幣局の名称は、明治2(1869)年から明治9(1876)年まで「造幣寮」、明治10(1877)年から「造幣局」ですが、便宜上、本稿では全て「造幣局」で統一します。

2 日進学社の「社」を、「舎」と表記することもあります。本稿では「日進学社」で統一します。

3 993-02 諸規則之類(造幣博物館蔵)

4 鈴木栄樹(1995)『益田孝と造幣寮の日進学舎』朝尾直弘教授退職記念会編『日本国家の史的特質(近世・近代)』p.315-335、思文閣

5 明治30年(1897)頃の1円は、現代の貨幣価値に換算すると約2万円と推定されます。

6 大阪市編(1933)『明治大正大阪市史』第1巻、清文堂出版株式会社、p.56

7 日進学社幼稚園は、大阪府内でもかなり早い時期に設置された園のひとつです。ここに「保姆」として勤務した小田末(旧姓:木村)という女性は、大阪に幼稚園を普及させる狙いがあった当時の府知事の抜擢により、日本初の保育者養成機関で幼児教育の方法を学んだ人物でした。

新しい五百円貨幣が登場！

令和3年度、偽造抵抗力強化の観点から、素材等を変更して新しい五百円貨幣が製造されることとなりました。これまでの五百円貨幣からの変更点、偽造防止技術の特徴をご紹介します。

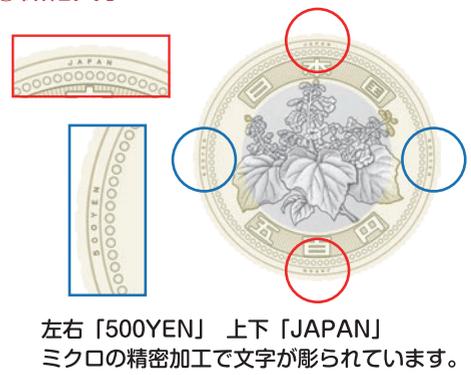
	これまでの五百円貨幣	新しい五百円貨幣
図柄		
素材	ニッケル黄銅	ニッケル黄銅、白銅及び銅 (バイカラー・クラッド)
品位 (千分位)	銅 720、亜鉛 200、ニッケル 80	銅 750、亜鉛 125、ニッケル 125
量目	7.0 グラム	7.1 グラム
直径	26.5 ミリメートル	

偽造防止技術の特徴

①微細線・微細点

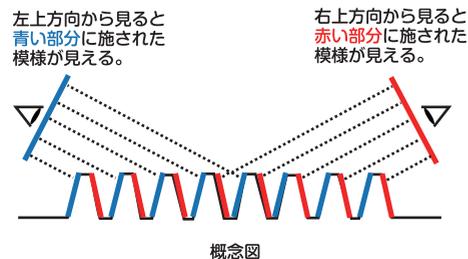


②微細文字



③潜像

潜像は、光の反射により2種類の像が見える仕組みで、貨幣を見る角度によって「00」の中に見える文字が変わります。



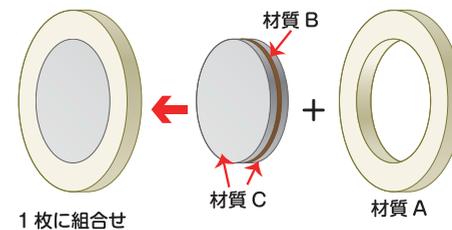
④異形斜めギザ

貨幣の側面には、これまでのニッケル黄銅素材の五百円貨幣にある斜めギザに加え、一部に他のギザとは異なる形状の「異形斜めギザ」を施しています。



⑤バイカラー・クラッド (二色三層構造)

バイカラー・クラッド貨幣とは、異なる種類の金属板(材質B、C)をサンドイッチ状に挟み込む「クラッド」技術でできた円板を、それとは異なる種類の金属(材質A)でできたリングの中にはめ合わせる「バイカラー」技術で組み合わせたものです。通常貨幣としては初めて採用されます。



郵便制度 150 周年記念貨幣関連製品の抽選会



抽選日：令和3年5月25日（火曜日）

販売製品	販売価格（消費税・送料込）	販売数量	申込数
郵便制度 150 周年記念一万円金貨幣	145,000円	20,000個	205,874個
郵便制度 150 周年記念千円銀貨幣	11,700円	50,000個	260,856個
郵便制度 150 周年記念貨幣発行記念メダル	32,000円	3,000個	14,177個

近代通貨制度 150 周年記念一万円金貨幣及び 円誕生 150 周年貨幣セット —造幣局創業 150 周年を迎えて—の抽選会



抽選日：令和3年7月20日（火曜日）

販売製品	販売価格（消費税・送料込）	販売数量	申込数
近代通貨制度 150 周年記念一万円金貨幣	145,000円	20,000個	202,791個
円誕生 150 周年貨幣セット —造幣局創業 150 周年を迎えて—	2,500円	45,000セット	121,266セット

申込受付の結果、いずれの製品も申込数量が販売数量を上回りましたので、抽選会を開催いたしました。



国宝章牌



造幣局製品の贈呈

章牌の製品化及び周知活動にご協力いただいた薬師寺に
国宝章牌「薬師寺」（銀）を贈呈しました。

令和3年10月8日（金曜日）

[写真左側]

法相宗大本山 薬師寺 管主 加藤 朝胤 様

薬師寺

令和四年 純金千支メダル(寅)

皆様からご好評をいただいている干支をテーマにした純金千支メダル、純金千支十二稜メダル及び純金千支メダル(1/4オンス)につきましては、今回、令和四年の干支「寅(とら)」をデザインし販売いたします。
新しい年を記念し、これらの製品をお客様のコレクションの一つに加えていただき、未永くご愛蔵いただければ幸いです。

純金千支メダル



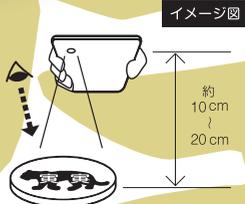
表面



裏面

表面には、干支「寅」をレリーフ(浮き彫り)で表現しています。
裏面は、金の輝きを際立たせるために一部鏡面仕上げとし、特殊な技術を用いて、ホログラム潜像により「寅」の文字を現すようにしています。

- *ホログラム潜像の確認方法
1.LED照明をメダル裏面から約10cm~20cm離して、垂直に当てます。
(光源としてスマートフォンのライトも使用可能です。)
- 2.メダルの奥に「寅」の文字が現れます。
右の二次元バーコードを読み取ると、イメージ写真をご覧いただけます。

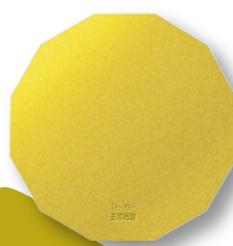


イメージ図

純金千支十二稜メダル



表面



裏面

形状は十二角形で、表面の中央部に干支「寅」をレリーフ(浮き彫り)で表現し、その外周部に辰刻法(十二支による時刻表示法)を模した十二支の文字を配しており、梨地加工技術を施しています。
裏面は、無地の梨地仕上げです。

純金千支メダル(1/4オンス)



表面



裏面

表面・裏面いずれも干支「寅」をデザインしています。
表面の寅はレリーフ(浮き彫り)で表現し、裏面の寅のシルエットは虹色発色加工技術を用いて表現しています。

製品名	純金千支メダル(寅)	純金千支十二稜メダル(寅)	純金千支メダル(1/4オンス)(寅)
材質	純金(造幣局品位証明刻印入り(「  」)をメダル裏面に打刻))		
直径(長径)・重さ	直径:40mm・重さ:約95g	長径:30mm・重さ:約20g	直径:20mm・重さ:約7.8g
仕上・その他	裏面の一部鏡面仕上げ・漆風黒ツヤ塗装木製ケース入り	裏面梨地仕上げ・特製桐箱入り	裏面の一部鏡面仕上げ・特製紙ケース入り
販売価格(消費税・送料込)	926,000円	195,000円	78,000円
販売予定数量	400個	1,400個	1,700個
申込数	申込数に制限はありません。 <small>※販売予定数量を超えたときは、抽選とさせていただきます。その際は、申込数にかかわらず、購入数を制限する場合があります。</small>		
申込受付期限	令和3年12月23日(木曜日)消印有効		
申込方法	同封の申込はがき又は郵便はがき若しくは造幣局オンラインショップ(https://www3.mint.go.jp/)により、お申し込みください。		
申込先	(はがき表) 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-79 造幣局「干支メダル」係 (はがき裏) ①メダルの種類及び申込数量、②郵便番号、③住所、④氏名及び読み仮名、 ⑤電話番号、⑥お客様コード(9桁の数字、造幣局に登録のある方はご記入ください。)		

受け付けた方への連絡	造幣局発行の払込用紙等ご入金のご案内を、 令和4年1月上旬頃(抽選となった場合は1月中旬頃)から順次 送付いたします。払込用紙の裏面等に記載の注意事項をよくお読みの上、払込期限内にコンビニエンスストア、郵便局(ゆうちょ銀行)又は銀行(銀行振込手数料はお客様のご負担)でご入金願います。30万円を超える場合は、コンビニエンスストアではご入金いただけませんので、郵便局(ゆうちょ銀行)、銀行をご利用ください。 なお、造幣局オンラインショップからお申し込みいただいた方は、クレジットカードでもお支払いいただけます。また、製品の発送はご入金・お支払い後となります。抽選となった場合は、受付できなかった方への連絡はいたしませんので、ご了承ください。
製品の発送	令和4年1月中旬頃(抽選となった場合は1月下旬頃)から順次 発送いたしますが、お申込みの状況によっては、製品のお届けが3月頃となる場合がありますので、ご了承ください。なお、複数の製品を同時にお申込み及びご入金・お支払いいただきましても、別々のお届けとなる場合があります。
返品について	製品到着後、速やかに段ボールから取り出しご確認ください。万一、不良品又はお申込みと異なる製品が届いた場合は良品と交換いたします。恐れ入りますが、到着後速やかに造幣局へご連絡のうえ、ご返送願います(送料造幣局負担)。なお、お客様のご都合による返品やお客様の責に帰すべき不具合には応じることはできませんのでご注意ください。
個人情報の取扱い	お客様の個人情報は、ご入金・お支払いの確認、製品の発送等お申し込みいただいた製品の販売に関する事務に利用するほか、造幣局製品やイベントのご案内、お問合せ・アンケートのために利用する場合があります。お客様のご理解がない限り、その他への利用はいたしません。

造幣局では、最新の情報をメールマガジンで配信しています。
ご登録は、右記のホームページまでお願いします。

※この冊子に掲載している画像はイメージのため、現物とは異なります。

発行所 独立行政法人 造幣局
〒530-0043 大阪市北区天満1丁目1番79号
造幣局ホームページ(URL)<https://www.mint.go.jp/>
お問合せ先 造幣局お客様サービスセンター
TEL 0570-01-2626(ナビダイヤル)
ナビダイヤルをご利用できない場合06-6351-2626
(平日午前9時~午後5時)
令和3年12月2日発行(第79号)